

One step ahead

第9回日本耳介再建学会

2026.10.16fri▶17sat

会場 札幌医科大学医学部

会長 札幌医科大学医学部 形成外科学講座 教授 四ツ柳 高敏

プログラム・抄録集

第９回 日本耳介再建学会 開催報告

目　　次

1、　学会日程表

2、　症例検討会プログラム

3、　参加者名簿

4、　Photo コーナー（学会の様子）

5、　参加者の感想

6、　主催者から

１、学会日程表

第1日目　10月16日 （金曜日）

13:00～17:00	**ライブサージャリー** 「小耳症（耳垂残存型）肋軟骨移植術」 場所：記念ホール2階 大ホール ⇔ 附属病院手術室 会場モデレーター　：仙台医療センター 形成外科 鳥谷部 荘八 千葉県こども病院 形成外科 石垣　達也 執刀医：四ッ柳 高敏
17:00～17:15	**ショートレクチャー** 「肋軟骨採取のコツ」 場所：記念ホール2階 大ホール 演者：札幌医科大学形成外科 原田 二郎
17:15～17:45	**意見交換会** 場所：記念ホール2階 大ホール 司会：札幌医科大学形成外科 四ッ柳 高敏
18:30～	**総合懇親会**

第2日目　10月17日 （土曜日）

9:00～12:30	**症例検討会** 場所：記念ホール2階 大ホール
12:30～13:40	**ランチョンセミナー** 「耳甲介型小耳症に対する肋軟骨移植動画の解説」 場所：記念ホール2階 大ホール 演者：札幌医科大学形成外科 四ッ柳 高敏
14:00～16:00	**ハンズオンセミナー**（※希望者のみ） 「人参を用いた小耳症肋軟骨フレームカービング」 場所：記念ホール1階 会議室A

２、症例検討会プログラム

開会の挨拶　　札幌医科大学形成外科 教授 四ッ柳 高敏

演題第1部　　座長 吉田 聖（九州大学 形成外科）

当院での耳介挙上術後の植皮生着についての検討

○権田 綾子[1]，四ッ柳 高敏[2]，一村 公人[1]（社会医療法人鳩仁会 札幌中央病院 形成外科[1]，札幌医科大学形成外科学講座[2]）

耳介形成術を経験してのふりかえり

○石垣 達也（千葉県こども病院 形成外科）

当院の小耳症初回手術の現状

○山中 浩気（京都大学大学院医学研究科形成外科学）

高齢患者における肋軟骨フルフレーム作成の経験

○妹尾 貴矢，濵本 有祐，高成 啓介（岡山大学病院 形成外科）

1 回法小耳症手術の肋軟骨フレーム

○濵本 有祐，妹尾 貴矢，高成 啓介（岡山大学 形成再建外科）

休憩（約5分）

演題第2部　　座長 妹尾 貴矢（岡山大学 形成再建外科）

耳介再建における顔面対称性を考慮した頬骨弓再建 ―第一・第二鰓弓症候群に対する血管柄付き骨骨膜移植の 1 例―

○髙木 信介（昭和医科大学形成外科）

小耳症術後、後頭部に円形脱毛を認めた 1 例

○佐々木 淑恵（群馬県立小児医療センター形成外科）

耳甲介部全層欠損に対して後耳介動脈穿通枝皮弁で再建した一例

○三浦 裕貴，佐々木 薫，五島 雅俊，高橋 一太，菅井 かれん，埴原 弘直，
大島 純弥,渋谷 陽一郎，相原 有希子，関堂 充（筑波大学医学医療系形成外科）

外耳炎治療後の耳介変形の１例

○松谷 瞳，尾﨑 峰（杏林大学 医学部 形成外科学教室）

休憩（約10分）

演題第3部　　座長 濵本 有祐（岡山大学 形成再建外科）

埋没耳術後の耳介形態経時変化の 3 次元解析

○鈴木 琢也，朝村 真一（和歌山県立医科大学 形成外科）

耳輪癒着症の診療について

○笠井 昭吾（済生会宇都宮病院 形成外科）

Low hair line に対し、耳介フレーム上の皮膚を植皮で置き換えた2症例

○戸澤 麻美，木村 千寿，村上 達郎，森 秀樹（愛媛大学医学部附属病院形成外科）

眼鏡・補聴器装着に支障をきたす低位耳介に対する治療方針の検討

○大杉 育子，山下 修二（川崎医科大学 形成外科学）

耳介低位の耳甲介残存型小耳症に対して段階的に遺残耳介の頭側移動を行った症例

○桑原 広輔（静岡県立こども病院 形成外科）

3、参加者名簿

全国よりお越しいただいた先生方　　43 名
札幌医科大学事務局(医師、事務)　　14 名

氏名　＊50 音順　敬称略	所属
青山　尚椰	東京都立小児総合医療センター
安里　令子	琉球大学病院
石垣　達也	千葉県こども病院
漆舘　聡志	弘前大学医学部附属病院
江藤 綾乃	水戸協同病院
大杉　育子	川崎医科大学
笠井　昭吾	済生会宇都宮病院
加藤　小百合	東京科学大学
金山 千恵	東京都立小児総合医療センター
菊地 陽	東京都立小児総合医療センター
京野 香織	自治医科大学
楠原　廣久	近畿大学奈良病院
久保村　憲	日本医科大学
桑原　広輔	静岡県立こども病院
権田　綾子	札幌中央病院
蔡　顯真	南大阪病院
櫻庭　実	岩手医科大学
佐々木　薫	筑波大学
佐々木　淑恵	群馬県立小児医療センター
首藤 加奈	よつば会クリニック
菅井　かれん	筑波大学
鈴木　琢也	和歌山県立医科大学
妹尾 貴矢	岡山大学
徐　東經	北海道大学
髙木 信介	昭和医科大学形成外科
髙田　明日香	日本医科大学千葉北総病院
武田 大介	聖マリア病院
玉田 一敬	東京都立小児総合医療センター
戸澤 麻美	愛媛大学
鳥谷部 荘八	仙台医療センター
西村 有美	滋賀医科大学
濵本 有祐	岡山大学

細川　七海	札幌医科大学
松谷　瞳	杏林大学
松田　來子	岡山大学
松本　俊太	函館五稜郭病院
三浦　裕貴	筑波大学
三柳　友樹	京都大学
森田　愛	福岡市立こども病院
森田　皓貴	名古屋大学
山内　誠	和泉市立総合医療センター
山中　浩気	京都大学
吉田　聖	九州大学病院
四ッ柳　高敏	札幌医科大学(事務局)
山下　建	札幌医科大学(事務局)
三浦　孝行	札幌医科大学(事務局)
加藤　慎二	札幌医科大学(事務局)
原田　二郎	札幌医科大学(事務局)
上田　直弘	札幌医科大学(事務局)
相神　なほ	札幌医科大学(事務局)
西端　魁志	札幌医科大学(事務局)
亀田　友里香	札幌医科大学(事務局)
田中　野々花	札幌医科大学(事務局)
髙宮　大稔	札幌医科大学(事務局)
田中　秀樹	札幌医科大学(事務局)
事務２名	札幌医科大学(事務局)



２日目　症例検討会にて集合写真

たくさんのご参加ありがとうございました！

４、Photo コーナー（学会の様子）

■1日目 ： ライブサージャリー 「 小耳症（耳垂残存型）肋軟骨移植術 」

手術室と会場をライブ映像と音声でつなぐライブサージャリー。会場内の大画面スクリーンと 6 台のモニターに手術映像が映し出され、映像を見ながら執刀医とディスカッションを行うことができます。

今回は、耳垂残存型の小耳症に対する肋軟骨移植術を実施しました。

耳介形成に先立ち、肋軟骨採取の様子からライブ配信を行い、採取時のポイントなどについて、札幌医科大学　形成外科　原田二郎医師が解説しました。
耳介形成が始まると、会場モデレーターの鳥谷部荘八先生、石垣達也先生をはじめ、参加された先生方から、「剥離の際に残す皮下茎の大きさ」「遺残耳垂を縫合する順番」「フレームワークの各部位の高さ」「対輪の断端と耳珠の連結部分に生じる段差の調整方法」など、多岐にわたる質問が寄せられ、活発な質疑応答が行われました。会場モデレーターを務めていただいた鳥谷部先生、石垣先生、ありがとうございました。



モデレーターの鳥谷部先生(左)と石垣先生(右)



ライブサージャリー中の様子



執刀医と質疑応答中

■1 日目 ： ショートレクチャー「 肋軟骨採取のコツ 」

ライブサージャリー終了後には、「小耳症における肋軟骨採取の方法とコツ」をテーマに、札幌医科大学形成外科　原田二郎医師による講演が行われました。

ライブサージャリーでも肋軟骨採取について解説がありましたが、動画を交えた詳細なレクチャーは、術式や手順を改めて確認する貴重な機会となりました。

講演では、肋軟骨の採取に使用する機械の説明から始まり、軟骨膜上の剥離、肋軟骨の採取方法、リークテスト、さらに軟骨膜・筋膜・皮膚の縫合に至るまで、実際の手術動画を用いながら、それぞれの手技や注意点について詳しく解説しました。

講演後には、「バンキング軟骨の組み立て方で気をつけていることは？」「手術時の立ち位置（人員配置）について教えてほしい」といった質問が寄せられ、活発な質疑応答が行われました。



肋軟骨採取について説明をしている原田二郎医師





質疑応答

■1日目 ： 意見交換会

本学会は、耳介の治療に本気で取り組んでいる、あるいはこれから取り組もうとしている医師が集い、相談や意見交換、勉強会を通じて、日本の耳介再建医療のレベル向上を目指す場です。
毎年恒例となっていますが、今回もまず、初めて参加された方々に向けて、会長の四ッ柳より、本学会の趣旨や運営の仕組みについて説明がありました。

続いて、本学会から、来年秋頃の発行を予定している教科書『耳介の外科治療』について、進捗状況の報告がありました。

また、本学会の発起人であり、長年にわたり会長を務めてきた四ッ柳が、今年度をもって札幌医科大学を退官することから、次回以降の本学会のあり方について、参加者間で意見交換が行われました。
その結果、四ッ柳の意思を引き継ぎ、次回は仙台医療センター 鳥谷部荘八先生が会長を務めてくださることが決定しました。開催時期については、11 月 4 日～5 日に福島県で顎顔面外科学会が開催されることを踏まえ、その翌日の 11 月 6 日を候補日として、参加者の皆さんの意見を伺いながら、最終的に決定することとなりました。
鳥谷部先生、次回会長をお引き受けいただき、誠にありがとうございます。



会長 四ッ柳による説明

■ 学会場でのひとこま① ～「珈琲研究会」が大活躍 ～

例年、本学会では、スターバックスのコーヒーをご用意し、参加者の皆さんにお楽しみいただいていましたが、今年は札幌医科大学の学生が運営する「珈琲研究会」が、本格的なコーヒーを振る舞ってくださいました。ホットコーヒーやアイスコーヒーはもちろん、エスプレッソやカフェラテも楽しむことができ、参加された皆さんも大満足のご様子でした。
学会 1 日目は朝 9 時から、2 日目は朝 7 時 30 分からと、早い時間から準備をしてくださった珈琲研究会の皆さん、本当にありがとうございました。



本学会のシールを貼った専用カップ
72 個に 1 個、四ッ柳の顔付きのカップが！



豆や淹れ方について丁寧にご説明いただきました
BGM にジャズが流れる雰囲気作りもグッド👍

■ 学会場でのひとこま② ～ 今年は学会ロゴ入りビスコ登場 ～

毎年、本学会では、会場入口に北海道を代表する銘菓を並べ、参加者の皆さんにお楽しみいただいています。今年はさらに、学会ロゴ入りの「ビスコ」も登場しました。



赤いロゴ、青いロゴの2種類

■2日目 ： 症例検討会

耳の治療に携わる先生方が、徹底的にディスカッションを行う症例検討会。日本耳介再建学会の目玉の一つです。一般的な学会では成功症例の報告が多くみられますが、本学会では、相談症例の発表が多いことが特徴です。

今回は、大きく分けて、本学会参加後の先生方ご自身の技術の向上、Low hair line に対するアプローチ、小耳症に合併する種々の疾患に対するアプローチについて発表がありました。先生方それぞれのご経験をもとに、とても活発なディスカッションが行われました。
また、日々の診療で直面する課題や悩みは同じであることも、改めて共有することができました。

本学会への参加を通じて、先生方の治療結果が格段に向上していることを実感でき、学会としても大変嬉しく思います。
今回も多くの演題をご発表いただき、本学会の症例検討会が目指す姿を体現するような、活発なディスカッションをありがとうございました。
座長を務めていただいた吉田聖先生、妹尾貴矢先生、濵本有祐先生にも心より御礼を申し上げます。



症例検討会でのディスカッション

■2日目 ： ランチョンセミナー

「耳甲介型小耳症に対する肋軟骨移植動画の解説」

今回のライブサージャリーでは、「耳垂残存型」小耳症に対する肋軟骨移植術を実施しました。これに対し、ランチョンセミナーでは、「耳甲介型」小耳症に対する肋軟骨移植術の手術動画を用いた解説講演を行いました。

講演では、耳甲介型のデザインから皮膚切開、剥離の手技、肋軟骨を組み立てる際の注意点まで、手術の各段階について詳しく解説しました。参加された先生方からは、軟骨フレームと遺残軟骨の具体的な連結方法などについて質問が寄せられ、活発な意見交換が行われました。



手術動画を詳細に解説する四ッ柳医師





質疑応答

終盤10分間（共催）メドエルジャパン株式会社

「人工内耳・人工中耳・骨導インプラント・骨導補聴器の製品説明」

ご好評をいただいている補聴器の製品説明を、ランチョンセミナーの終盤10分間に行いました。昨年に引き続き、本年度もメドエルジャパン株式会社様にご共催いただき、企業展示も実施しました。

製品説明では、オーストリア発祥のメドエル社の製品である人工内耳、人工中耳、骨導インプラント、骨導補聴器 ADHEAR について、それぞれの仕組みや概要などをご紹介いただきました。

その後、参加者の皆さんには企業展示ブースへ移動していただき、人工内耳（Cochlear Implant）、残存聴力活用型人工内耳（EAS：Electric Acoustic Stimulation）、人工中耳（VSB）、骨導インプラント（BoneBridge）、骨導補聴器 ADHEAR の試聴を体験していただきました。



メドエル様による製品説明



展示ブース

■2日目 ： ハンズオンセミナー

「 人参を用いた小耳症肋軟骨フレームカービング 」

例年開催している「肋軟骨フレームカービング」。
2 日間乾燥させ、肋軟骨に近い感触に仕上げた人参を使用し、彫刻刀や生検パンチを用いて肋軟骨フレームを作成します。フレームの作成後には、陰圧をかけることで、実際の手術に近い状態で凹凸の出方を確認していただきます。
回を重ねるごとに、先生方のフレーム作成のスピードが上がり、形態もより精巧になっており、着実な技術の向上が感じられます。



四ッ柳医師による最初のレクチャー





真剣にフレームを作成しています




札幌医大で小耳症を学ばれた高田先生(左)も指導係として参加してくださいました

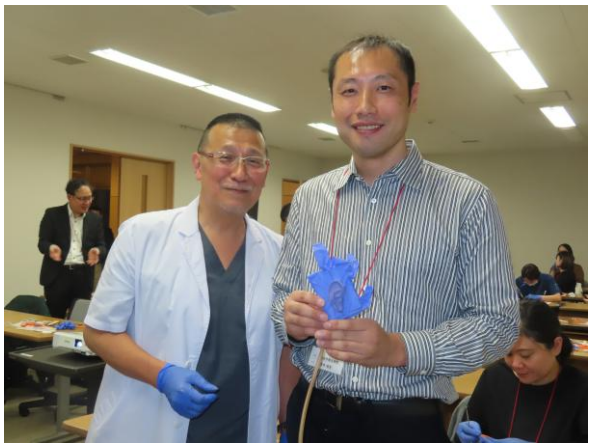



札幌医大で小耳症を学ばれた濵本先生(左)と三浦先生(右)も指導係として参加してくださいました




妹尾先生が作成された繊細でこだわりのつまったフレームに歓声と拍手が上がりました



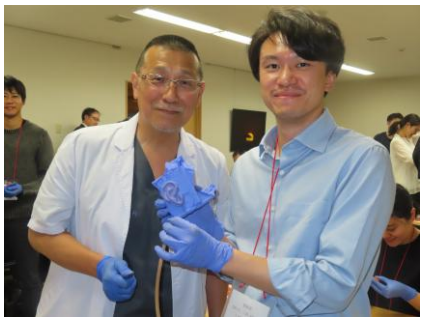


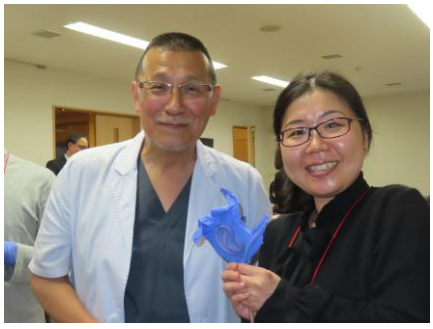
佐々木先生、1番乗り！とても綺麗なフレームです　　笠井先生、いつもありがとうございます













今年は 「会長　四ッ柳と一緒に写真撮影」というイベント（？）が流行りました



先生方が作成されたフレームです

５、参加者の感想

１．東京都立小児総合医療センター　形成外科　菊地　陽先生より

――――「そろそろ耳の方も始めますか。」
肋軟骨が一本採取されるとそう呟き、デザインを描く竹串はタクトの如く振り下ろされた。メスが走る、ハサミが動く、糸が締まる。その動きは止まることはない。外科医なら誰しも経験することがあるであろう、手技の反復や判断の連続を想起させるあの独特の間を感じさせることがない。しかもそれは判断を捨てカタチを押し付ける様な傲慢な手術ではなく、組織の状態に呼応し柔らかく包み込む。そのシンフォニーは肋軟骨でさえも骨抜きにし、あれよあれよと耳の形に。そして稀代のマエストロは観衆への愛嬌も忘れない。時に冗談を交えながら、一つ一つその手技の意味やコツを丁寧に語りかける。そしてクライマックス、ドレーンによる陰圧とは裏腹に観衆からは感嘆の声が漏れる。シンフォニーが聞こえているかと錯覚するほどの美しく立体的な耳がそこには存在した。若手もベテランも身を乗り出して目を凝らす、圧巻の 2 時間 30 分――――。

昨年、私は部長の玉田先生に勧められ初めて耳介再建学会に参加しました。そこで目にしたのが四ッ柳先生によるライブサージェリーでした。ここまで完成された美しい手術は見たことがなく、上司が勧めるのも納得でした。あっという間に小耳症手術の虜になり、気づけば夕方の懇親会で手術見学のお願いをしている自分がいました。6 月に札幌医科大学での 3 週間の見学を経て東京に戻り、少しばかり小耳症の手術を経験させていただきました。しかし、当然ながら納得のいく結果には至らず、見学時に撮影させていただいた四ッ柳先生の症例写真と見比べてはため息をつく日々でした。

そんな状況で参加した今年の第 9 回日本耳介再建学会ですが、ご指名いただきましたので、僭越ながら私なりの感想を書かせていただきます。

学会前に体調を崩していた私には、這ってでも札幌に行かなければならない理由がありました。前述の通り、小耳症手術に足を踏み入れてしまったからです。自分が施した手術に満足できず、より良い治療を探求する気持ち――形成外科医の皆様ならご理解いただけると思います。過去の結果が変わるわけではありませんが、一度執刀した以上、それ以上の結果を追求し続ける責任が生じるのです。「何が悪かったのか」「何が足りないのか」と自身を責める堂々巡りのような愁いと微熱を抱え、新千歳空港行きの飛行機に乗り込みました。

学会初日、早速ライブサージェリーが始まりました。冒頭に記した通り、昨年同様に至極の技が詰め込まれた手術はあっという間に終わりました。一方で、自分自身にとっては昨年とは違った視点で拝見できた部分もありました。自分の手術と照らし合わせることで、自分にとってより重要な Point が理解できたような気がします。堂々巡りのその先に、少し光が見えた瞬間でした。学会場には昨年以上に多くの先生方がいらっしゃり、過去最多の参加者数だったそうです。やはり皆さん、手術と試行錯誤を繰り返し、フィードバックと進化を得るために足を運んでおられるのだと感じまし

た。そして去年の私のように目を輝かせる若手の先生方の姿もあり、年々参加者が増えているのも深く納得いたしました。

初日の夜には懇親会が設けられました。今回、私は風邪を皆様にうつしてしまわないかと心配で大人しく過ごしていましたが、昨年も含めて振り返ると本当に素晴らしい出会いの場です。諸先輩方と懇親会でお話ししたことがきっかけで、札幌医科大学をはじめ様々な施設の見学に伺わせていただくことができました。また、同世代の小児先天異常を扱う医師たちとは、日常診療やキャリアパスについての悩みを語り合うことができ、明日への活力となりました。前回の耳介再建学会以来1年ぶりにお話しした先生とも昨年と変わらず意気投合し、まるで普段から同じ職場で働いているかのような錯覚を覚えたほどです。どの席も話に花が咲き大いに盛り上がっていました。席次を細やかに配慮された秘書の菊地様の妙技もさることながら、立場は違えど参加者の皆さんが同じ熱量でこの学会に参加している証なのだと思います。また懇親会の終盤には、全9回に参加された先生方や、そのすべてで会長を務められた四ッ柳先生へ記念品の贈呈がありました。肩肘を張らず素直にお祝いをする、家族で開いた誕生日会のようなとても温かい時間が流れており、そんなアットホームな空気感もこの学会ならではの魅力だと感じました。

2日目の朝は、東京にはまだ訪れない冷たく澄んだ空気が札幌を包んでいました。その空気を深呼吸し、寝ぼけた頭をすっきりさせて学会場へと向かいました。2日目も朝から多くの方々が参加され、症例検討会では活発な質疑応答が行われていました。お互いに本音で意見交換がなされる中、特に自身の治療結果の変遷をテーマとされた石垣先生のご口演は、今の私にとって大きな励みとなり背中を押してくれるものでした。また第一第二鰓弓症候群の頬骨弓部の再建に関する髙木先生のご口演は、私も課題と感じていた耳介再建部の陥凹という問題に対する一つのサジェスチョンとなりました。多くの先生方も同様の問題意識をお持ちのようで、格段に活発な議論が交わされていました。2つの発表を例に挙げましたが、枚挙に暇がないほどどの口演も大変興味深いものでした。ランチョンセミナーでは、耳甲介残存型に対する軟骨移植を四ッ柳先生に解説いただきました。余すことなくその技術を分かりやすく説明してくださり、編集された30分弱のビデオでしたが「四ッ柳先生なら本当に30分で仕上げてしまうのではないか」と思わせてしまうのが恐ろしいところです。

そして最後に、ニンジンを利用したフレームワーク作成のハンズオンセミナーが開催されました。ニンジンは実際の軟骨と比較して崩れやすく、切り出したパーツを縫合糸で組み上げるのに非常に苦労しました。しかし同時に、初日のライブサージェリーで感じていた自身の課題を再確認する貴重な機会となりました。美しい耳を形成するためには、フレームワークに立体的な構造を付与することが重要であることは理解していますし、それを意識したパーツの作成自体は比較的できていると思っていました。しかし、それらを組み合わせると予定とずれた位置になってしまい、さらに皮下に埋入するとより変形してしまう――それが私の作るフレームワークの問題点でした。

縫合時にボロボロと崩れるニンジンを見て、ハッと気がつきました。変形の原因は「パーツとパーツの接触面の不整」にあったのだと。接触面が平らでなかったり小さかったりしたため、せっかく良い位置で縫合固定してもその後にずれが生じたり、他のパーツを組みあわせた際に歪みが生じて

しまっていたのです。ベースプレート同士、耳輪や対耳輪とベースプレート、耳珠部分のベースなど、それぞれの接触面を平らに整え安定させることが何より重要なのだと気づかされました。確かにライブサージェリーを振り返ると、四ッ柳先生はすべてのパーツでその処理を丁寧に行っておられました。先生の手にかかるとそれはほんの一瞬の出来事であるため見落としがちですが、私にとっては非常に重要なステップだったのです。崩れやすいニンジンで接触面を整え、安定した組み上げを行うこと――これが次回の小耳症手術までの私の課題となりました。

まさに琴線に触れる 2 日間でした。参加された皆様が美しい耳を目指し、治療技術の向上を求めておられます。高い熱量で議論がなされ、トップランナー達が最適解を模索して耳介再建のレベルを一歩前へと押し上げる。ベテランは惜しみなく技術を披露し、若手は目を輝かせ、中堅はそこに光を見出す。これまで様々な学会やセミナーに参加してきましたが、これほどまでに純度の高い学会は他にありませんでした。第 1 回から第 9 回に至るまで、この学会が日本の耳介再建の質向上に与えた影響は計り知れないものがあると、若輩ながら痛感しております。今後もこの素晴らしい学会が続き、小耳症の子どもたちの笑顔が増えていくことを心より願っております。

来年は四ッ柳先生の奈良県立医科大学へのご異動もあり、仙台医療センターの鳥谷部先生と三浦先生が主宰されるとのことでした。堂々巡りの愁いと確かな希望を胸に、また参加させていただきたいと思います。





ハンズオンセミナーにて

2．群馬県立小児医療センター　形成外科　佐々木　淑恵先生より

初回は一昨年の第7回の耳介再建学会。数年前から当科のほぼ全ての手術を執刀する環境になり、小耳症手術も行うことになったのですが、多くの症例を経験・指導頂いた他の疾患とは異なり、当院では耳作りに関しては数年に一度巡り合うかどうかの一大イベントです。一生懸命作ったものの満足な仕上がりとは思えず、納得のいく耳を作るために学ばねばならないと思い、本会に参加しました。

ライブサージャリーから始まり、懇親会、そして症例検討会、ニンジン練習と盛り沢山のスペシャルコースで一度参加したらやみつきになるこの耳の会、今年は例年よりも 1 ヵ月早い 10 月開催で降雪がなさそうでしたので、札幌市内の丘珠空港から向かおうと思い立ち、新潟経由、トキエアーに搭乗し、胸を弾ませ向かいました。

さて、会場にたどり着くと今年もモニターが沢山設置されており、札幌医科大学病院の手術室から生中継が始まるところでした。四ツ柳先生から開会のお話があり、肋軟骨採取がスタートしました。細かく手順を解説しながら手術を進めて下さるのでまるで一緒に参加しているような気分になります。しばらくすると先程まで会場にいらした四ツ柳先生がモニターからそろそろ耳を始めますねーと手術に入られます。ベテラン看護師さん（プリティさん）の紹介もあり、いつもながらチームで取り組んでいる様子が垣間見られ、ほっこりするのもつかの間、華麗なる手さばきでどんどん進んでいくのでメモを取る手が休まりません。ちょっとしたコツが沢山出てきて追いつくのに必死です。一太刀で削ってどんどん美しい形になっていく様は毎度感動します。耳が形作られてきたころ、いつの間にか胸は閉創されており、あっという間にライブ配信が終わってしまいます。続いて原田先生の肋軟骨採取のいろはのレクチャーがあり、先ほど聞きそびれていた事項やコツ、意識していることなど詳細を確認することができました。余韻にひたる間もなく、場所を移動して懇親会・2 次会・3 次会 4 次会 5 次会…今年も余すことなく札幌の美味しいものを堪能しました！懇親会では楽しくお話して飲み友達のような感覚でいたら実は論文や教科書などでよくお名前をみかけていたお偉方の先生だったりして、色んな分野で活躍されている先生方と仲良くなれるのも、熱い心意気を肌で感じられるのもこの会ならではの素敵な時間です。

昨年はこの会の翌々週に小耳症手術を予定し、イメージが脳裏に焼き付いた状態で手術に挑むことができました。今年はその報告と初めての耳介挙上になるので沢山経験されている先生方のご意見を伺えればと思い発表致しました。とても素敵な耳を作られている岡山大学の妹尾先生が座長で優しく見守っていただき、発表後に同じような脱毛を経験された先生からもお声がけいただき、拙い発表でしたが、今後も地道に一つ一つの症例に真摯に向き合い、症例を積み重ねていければと思います。一期法での耳作り、骨付き皮弁での土台の再建など新しい経験の報告、相談症例、盛りだくさんの内容で、とても勉強になりました。ランチョンセミナーでは耳甲介型症例の手術解説コーナーが開催され、昨日に引き続き耳つくりの極意をご教示いただきました。（耳介挙上の手術についても手術解説コーナーがあったら嬉しいなぁ、などとこっそり思ったりもしました。）

〆はニンジンを使った耳介フレーム作り体験コーナー。初回は全くもって立体感がつかめず、2回目は耳珠付近の立体感が足りず、今回は頑張るぞ！と意気込んでニンジンに挑みましたが、飛行機に間に合わなくなってしまうため、途中で中座させていただきました。帰宅してからニンジンを冷蔵庫で 2 日干しにしてリベンジしています。来月の小耳症手術に向けてばっちり下準備を整えて挑もうと思います。

札幌開催は今年で最後のお知らせをうけ、衝撃でしたが、来年以降も会は存続とのこと、また来年も楽しみにしています。皆様、ありがとうございました。



症例検討会でのご発表中



ハンズオンセミナーにて

６、主催者から

札幌医科大学　形成外科　　四ッ柳高敏

第 9 回となる本学会を無事に終え、安堵しております。初参加の方もさらに増加し、今回は 43 名の方が参加されました。回を追うごとに耳の輪が拡がってきていることを実感します。例年雪に当たってしまうため、今年は 1 ヵ月早く開催したおかげで、雪は降らなかったものの、急に冷え込んでしまい、やはり常連の方々の中に冬将軍が潜んでいるのではないかという疑念は残ります。

初日のライブサージャリーは、典型的な耳垂型小耳症の肋軟骨移植で、中継でも声がはっきり聞こえ、質疑応答を随時行うことができました。私の方でも、より細かな手技上の注意点などお伝えすることができたのではないかと思っております。

意見交換会では、来年の本会の開催につき、札幌での開催が困難であり、鳥谷部先生のご快諾の元、仙台医療センターでの開催を計画いただくことで、皆様のご了承をいただきました。日時はアンケート結果なども踏まえて追って決定することとなりました。

夜の懇親会は、ほとんどの方が参加されたので、大人数になりましたが、例年通り大盛り上がりでご満足いただけたのではないかと思います。本会のこれまでの全 9 回の皆勤賞の 4 名の先生には、記念の品が送られました。大体の方は 2 次会でお帰りになったと思いますが、一部の有志の方は 3 次会まで行ったようで、皆さんお元気ですね。

翌日の症例検討会は、前日かなりの夜更かしだったにも関わらず、朝からほぼ皆さん参加されており、活発な意見交換がありました。通常の学会ではできないようなディープなディスカッションが本会の売りですが、今年は特に中身が濃かったように思います。何より、発表で出されてくる耳の出来栄えが当初に比べ格段にアップしているのを見れたことが一番の収穫でした。そして、個人的には、本学会が、全国の耳介再建のレベルアップにあることを考えると、この 9 年間がけっして無駄ではなかったと実感できたことが何より嬉しいことでした。

ランチョンは昨年好評だった動画による手術解説としました。ライブサージャリーでは耳垂型を行ったので、ここでは耳甲介型の 30 分程度の動画を流しながらポイントを解説する形としました。人工中耳 VSB や貼付型の骨導補聴器アドヒアなどを販売しているメドエルさんに協賛いただきましたが、形成外科の学会を、聴覚補償機器の会社が担当してくれるということは、これまで耳鼻科にしか目が行っていなかった方が形成外科に振り向いていただけたという点で大きな意味があることだと思っております。

ハンズオンも出席者が多く、机も機器もぎりぎりで何とか行ったのですが、やはり出来栄えが毎年向上しており、特に常連の方々の作った耳は、人参という難しい材料であるにも関わらず、こだわりが凝縮されていて素晴らしい完成度でした。

さらに、実は今年札幌医大生のサークルでコーヒー研究会の方々に 2 日間会場フロア前に出店していただきました。ほぼボランティアでやってくれたのですが、建物に入ったとたんコーヒーのいい香りがしてきて、また色々なコーヒーの飲み比べもできて、出席された方々は大喜びでした。彼らもちょこちょこライブサージャリーを見に来たりしていて、勉強になったようです。こういう形での学生との交流もまた非常に良いものでした。

なんとなく色々書いてしまいましたが、最後に纏めとして、来年は私の方で本学会を担当できない状況となりますが、再来年の 11 回では何とかまた学会を主催すべく準備していきたいと思っています。そして、これまでの 9 回で、皆様と一緒にレベルアップして来れたことを嬉しく、かつ頼もしく思ったと同時に、本学会のこれからの発展と皆様のますますの向上を祈念して、乾杯！

本当に最後になりますが、これまでライブサージャリーの準備始めとした本学会全体の運営、指揮、およびお弁当のセレクトに並々ならぬ努力をしてくれた山下先生と、事務全般を引き受けてくださり、全て完璧に遂行してくれた菊地さんには頭が上がりません。この場を借りて深謝申し上げます。